

# *Journal of Japanese Studies* 書評の分析

## ——書評から見た台湾の日本研究 (1)——

岡崎 幸司

### 1. はじめに

台湾と日本は隣国であることにくわえ、歴史的な背景もあり密接な関係を有している。台湾では日本語をはじめとする日本関係の教育や研究も盛んであり、日本関係の学科に限っても30大学・2専科学校（日本の短期大学あるいは高等専門学校に相当）が開設、専任教員だけでも400名強を擁し、在學生は1万名を超えている。非常勤教員や純粹研究機関、さらには法学部等日本関係学科以外に所属する日本研究者を含めると、日本研究者の数は優に500名を超えるであろう。

台湾で行われている日本研究については、川島（2003）、西川（2010）、徐（1999）が、具体的内容や専任教員の専門分野などについて紹介している。このうち、川島（2003）は、日本から台湾における日本研究の水準にも言及、「これは日本側の事情にもよるが、台湾の日本研究が日本の学界で引用されることはきわめて稀である」（p.29）とする評価を下している<sup>1)</sup>。

これらの先行3論文に対し、岡崎（2014）、岡崎（2016）は研究の国際化という状況を踏まえ、A&HCI（Arts & Humanities Citation Index）、SSCI（Social Sciences Citation Index）に収録されている日本専門3雑誌（*Journal of Japanese Studies: JJS*、*Monumenta Nipponica: MN*、*Social Science Japan Journal: SSJJ*）を対象に国際的な日本研究に対して台湾がどの程度貢献しているのか、分析を試みた。岡崎（2014）では編集委員・諮問委員の所属を、岡崎（2016）ではサンプル期間として2001年から2014年までの14年間における論文（Article）執筆者の発表時点における所属をそれぞれ調査した<sup>2)</sup>。その結果、台湾からは編集委員・諮問委員ともに選出されておらず、また論文発表も行われていないことが判明、国際化の余地が大きいことが明らかになった。

岡崎（2014）、岡崎（2016）は雑誌の編集委員・諮問委員そして雑誌掲載論文のみを対象にしており、書籍を取り上げていないという難点がある。書籍に関しては、李・王（2015）が紹介しているが如く分野によっては学術書、とりわけ英文専門書の影響力は論文を上回るという見解がある<sup>3)</sup>。実際、岡崎（2016）で指摘されているようにJJS、MN、SSJJともに論文や研究ノート類をはるかに上回る本数の書評を掲載している。

そこで、本稿では岡崎（2014）、岡崎（2016）同様に上記の日本専門国際学術雑誌3誌のうちJJSを取り上げ、書評論文ならびに書評で取り上げられた書籍の出版国と評者の所属を分析することで、川島（2003）などの先行研究や岡崎（2014）、岡崎（2016）とは異なった視点から台湾の日本研究に対する国際的な位置づけを見ることにしたい。なお、本稿ではJJSの書評論文および書評で取り上げられた書籍のみを対象とし、MNならびにSSJJについては次号以下に譲ることとする。

## 2. 研究手法

本稿では JJS について 2001 年から 2015 年までの 15 年間の調査対象期間、巻号にすると 27 巻 1 号から 41 巻 2 号までの 30 冊をサンプルとして、書評論文 (Review Essay) ならびに書評 (Review) で取り上げられた書籍を対象にその出版国と出版社、そして執筆者 (評者) の所属国ならびに所属機関を調査する。本稿では書評論文と書評を合わせて (広義の) 書評と称することがある。

さて、JJS の Submission of Manuscripts によると書評を希望する書籍は同誌に送ることになっている。書評がどのように行われるか、同誌に送付された書籍すべてが書評の対象とされるのかどうか、などその具体的なプロセスについては明記されていないが、必要に応じて諮問委員の意見も参考にして Editor (Co-Editor) や Associate Editor あるいは編集委員会で評者を決定、書評を依頼するものと考えられる。

言うまでもなく、対象書籍に好意的な評価を与える書評もあれば、批判的あるいは否定的な評価を下す書評もあろう。肯定的な評価であれ、批判的な評価であれ、書評に値するというということで、本稿では評価の如何にかかわらず取り上げられた全書籍を一律に対象とした。ただし、VHS 作品 (ビデオ) を対象とした書評は除いた。

## 3. データ

### 3. 1. 全体像

次項の表 1 が 2001 年から 2015 年までの 15 年間の JJS に掲載された書評論文と書評の巻号別のデータである。書評論文は掲載される時もあるれば掲載されない時もあり、むしろ掲載されない号の方が多い。掲載数が少ない書評論文に対して書評は常時 20 本以上、多いときには 40 本以上も掲載され、この 15 年を平均すると毎号 32 本、年間 63 本にのぼる書評が掲載された計算になる。なお、書評論文・書評ともに 1 冊の書籍のみを対象とするのが一般的であるが、数冊から 10 冊近い書籍を取り上げて論じたり評していることもあるので、表 1 においては書評論文・書評の本数あるいは執筆者数と対象となった書籍の数は必ずしも一致していない。

JJS は Society for Japanese Studies が発行、事務局が米国のワシントン大学 (University of Washington, Seattle) に設置されている英文学術雑誌であることから、論文及び研究ノート類、書評論文、そして書評はすべて英文で執筆されている。書評論文ならびに書評で取り上げられるのも基本的に英語で執筆された書籍か外国語から英語に翻訳された書籍である。しかしながら、若干数とはいえ、Hilaria Gössmann, *Schreiben als Befreiung: Autobiographische Romane und Erzählungen von Autorinnen der Prolettarischen Literaturbewegung Japans*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1996 (27 巻 1 号、2001 年)、Claire Dodane, *Yosano Akiko: Poète de la passion et figure de proue du féminisme japonais*, Cergy : Publications Orientalistes de France, 2000 (27 巻 2 号、2001 年)、Tetsuya Takahashi, *Yasukuni mondai*, Tokyo: Chikuma Shinsho, 2005 (高橋哲哉『靖国問題』ちくま新書、33 巻 2 号、2007 年) のように英語以外の言語、ドイツ語やフランス語、あるいは日本語で執筆された書籍を取り上げた書評も見られる。ただし、本稿がサンプル期間とした 2001 年から 2015 年においては中国語や朝鮮語 (韓国語) で執筆された書籍が書評論文・書評で取り上げ

られたことは一度もない。

JJS は日本研究の人文社会科学系総合学術雑誌であるため、書評論文や書評で取り上げる分野は多岐にわたっている。文学や歴史、宗教は言うまでもなく、教育、政治、経済、スポーツ、音楽、食事から、David E. Kaplan and Alec Dubro, *Yakuza: Japan's Criminal Underworld*, Berkeley: University of California Press, 2003 (30 巻 2 号、2004 年) に見られるように文化や社会関連に至るまでありとあらゆる方面に広がっている。また、本格的な専門書から先述した高橋哲哉『靖国問題』のように新書も含め、書籍の形態に関わらず幅広い書籍が書評の対象にされている。

表 1 *Journal of Japanese Studies* 書評論文及び書評対象書籍数と評者数：2001 年－2015 年

巻号 (年)	対象書籍数			執筆者数 (= 掲載本数)		
	書評論文	書評	合計	書評論文	書評	合計
27 巻 1 号 (2001 年冬)	0	28	28	0	24	24
27 巻 2 号 (2001 年夏)	0	22	22	0	21	21
28 巻 1 号 (2002 年冬)	0	30	30	0	30	30
28 巻 2 号 (2002 年夏)	0	28	28	0	26	26
29 巻 1 号 (2003 年冬)	0	37	37	0	34	34
29 巻 2 号 (2003 年夏)	10	42	52	2	36	38
30 巻 1 号 (2004 年冬)	0	35	35	0	33	33
30 巻 2 号 (2004 年夏)	1	37	38	1	34	35
31 巻 1 号 (2005 年冬)	0	28	28	0	25	25
31 巻 2 号 (2005 年夏)	2	28	30	1	27	28
32 巻 1 号 (2006 年冬)	0	30	30	0	30	30
32 巻 2 号 (2006 年夏)	0	21	21	0	21	21
33 巻 1 号 (2007 年冬)	0	41	41	0	37	37
33 巻 2 号 (2007 年夏)	3	39	42	1	39	40
34 巻 1 号 (2008 年冬)	0	38	38	0	38	38
34 巻 2 号 (2008 年夏)	0	43	43	0	39	39
35 巻 1 号 (2009 年冬)	0	33	33	0	33	33
35 巻 2 号 (2009 年夏)	0	37	37	0	33	33
36 巻 1 号 (2010 年冬)	0	30	30	0	30	30
36 巻 2 号 (2010 年夏)	0	35	35	0	35	35
37 巻 1 号 (2011 年冬)	0	34	34	0	31	31
37 巻 2 号 (2011 年夏)	1	29	30	1	29	30
38 巻 1 号 (2012 年冬)	0	31	31	0	29	29
38 巻 2 号 (2012 年夏)	0	32	32	0	31	31
39 巻 1 号 (2013 年冬)	0	31	31	0	30	30
39 巻 2 号 (2013 年夏)	0	31	31	0	28	28
40 巻 1 号 (2014 年冬)	0	45	45	0	45	45
40 巻 2 号 (2014 年夏)	0	41	41	0	41	41
41 巻 1 号 (2015 年冬)	0	26	26	0	26	26
41 巻 2 号 (2015 年夏)	0	29	29	0	29	29
合計	17	991	1008	6	944	950

(注) 1. 執筆者数は延べ人数である。

2. 28 巻 2 号 (2002 夏) の書評で VHS 作品 1 本が取り上げられているが、本表では対象書籍数・執筆者数に含めていない。

3. 34 巻 1 号 (2008 冬) には 2 名で執筆した書評が掲載されているが、本表では 1 名で執筆したものとして扱った。

(出所) *Journal of Japanese Studies* のハードコピーより筆者作成

## 3. 2. 出版地

サンプル期間の15年間に書評論文あるいは書評が取り上げた書籍1008冊の出版地を国別にまとめたものが表2である。出版地は書評論文もしくは書評に記載された出版地によるものとし、出版地数の算出に際しては出版地が複数掲載されている場合はその数で除した。たとえば、書評論文・書評に対象書籍の出版地として日本と米国が掲載されていれば、日本、米国それぞれの出版書籍数は、 $(1 \div 2) = 1/2$ と計算する。

さて、米国で編集発行されているという事情、英文学術雑誌という性格からであろう、JJSの書評論文・書評で取り上げられたのは米国の書籍が圧倒的に多く、656.5冊、全体の65%を占める。米国に次ぐのは英国であり、235冊、全体に占める比率は23.3%、米英両国では88%、全体のほぼ9割に達する。第3位はオランダの33冊(3.3%)、日本は4位(18冊)、シェアにすると1.8%である。欧米、日本、豪州で大部分で占めるが、おのおの1冊とはいえフィンランドやトルコで出版された書籍の書評も掲載されていた。

アジアの出版社が発行した書籍で書評論文・書評の対象とされたのはそう多くはない。日本で発行された18冊を除くと香港で出版された書籍2冊が対象となったのみであり、中国大陸、台湾、韓国という隣国で出版された書籍は対象にされていない。日本と香港を合計しても20冊、全体に占めるアジアの比率はわずか2%、微々たるものである。

表2 書評論文・書評対象書籍の出版地

順位	出版地	書籍数	順位	出版地	書籍数	順位	出版地	書籍数
1	米国	656.5	7	カナダ	7	12	フィンランド	1
2	英国	235	8	フランス	5	12	スイス	1
3	オランダ	33	9	デンマーク	4	12	トルコ	1
4	日本	18	10	ベルギー	3		不記載	9
5	豪州	16.5	11	中国香港	2	合計		1008
6	ドイツ	15	12	オーストリア	1			

(注) 1. 出版地が複数掲載されている場合はその数で除した。出版地の記載は書評論文もしくは書評に記載された内容による。

2. 28巻2号(2002夏)の書評で取り上げられたVHS作品は除いた。

(出所) *Journal of Japanese Studies* のハードコピーより筆者作成

## 3. 3. 出版社

表3で営利・非営利を含め出版社別の書籍のうち上位10位とアジアの出版社を示した。前述したように、日本・香港以外のアジアで出版された書籍を取り上げた書評は掲載されていないため、中国・台湾・韓国の出版社名は表3では見られない。

書評の対象とされた書籍の出版数が最も多いのがRoutledge (Curzon, RoutledgeCurzon)で116冊、わずか1冊の差でUniversity of Hawai'i Pressが続いている。Routledge (Curzon, RoutledgeCurzon)とUniversity of Hawai'i Pressが100冊を超えただけで、3位以下は1位・2位に比べると冊数が急減する。上位10位の顔ぶれを見ると、1位のRoutledge (Curzon, RoutledgeCurzon)と7位のPalgrave (Palgrave Macmillan)を除くと、すべて米英にある著名大学の部局あるいは大学出版会である。日本関係の書籍は膨大な数が発行されていると考えられるが、JJSに掲載された書評から見る限り、表3はRoutledge (Curzon, RoutledgeCurzon)やUniversity of Hawai'i Pressをはじめとする国際的に知られた出版社や有名大学出版会が日本研究に対して相対的に強い関心を有していることを示唆している。

表3 出版社別書籍数

順位	出版社	書籍数
1	Routledge (Curzon, RoutledgeCurzon)	116
2	University of Hawai'i Press	115
3	Harvard University Asia Center (*)	69
4	University of California Press	60
5	Stanford University Press (**)	54
6	Cambridge University Press	39
7	Palgrave (Palgrave Macmillan)	36
8	Cornell University Press (***)	33
	Duke University Press	
10	Oxford University Press	31
25	International House of Japan (International House Press, I-House Press) (国際文化会館アイハウス・プレス)	8.5
48	LTCB International Library Foundation (長銀国際ライブラリー基金)	2.5
49	Hong Kong University Press (香港大学出版社) その他 11 社	2
61	Kyoto University Press (京都大学学術出版会) その他 1 社	1.5
63	Academia Music, Tokyo (アカデミア・ミュージック) Chikuma Shinsho (ちくま新書: 筑摩書房) International Christian University Hachiro Yuasa Memorial Museum (国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館) Kodansha International (講談社インターナショナル: 2011 年解散) University of Tokyo Press (東京大学出版会) その他 58 社	1
126	Seori Shobo (世織書房) その他 6 社	0.5
133	2 社	0.3
	合計 (134 出版社)	1008

- (注) 1. 複数の出版社で出版している場合はその数で除した。  
 2. Distributor (販売者) は含まないが、協力出版社は含む。  
 3. 28 巻 2 号 (2002 夏) の書評で取り上げられた VHS1 作品は含めていない。  
 4. (\*) この他、Harvard University Press 発行の書籍 10 冊が取り上げられた。  
 5. (\*\*) この他、Stanford University Walter H. Shorenstein Asia-Pacific Research Center 発行の書籍 2 冊が取り上げられた。  
 6. (\*\*\*) この他、Cornell University East Asia Program 発行の書籍 5 冊が取り上げられた。  
 7. 10 位未満はアジア関係のみ掲載した。

(出所) *Journal of Japanese Studies* のハードコピー、各出版社ウェブサイトより筆者作成

アジアでは、日本の国際文化会館アイハウス・プレスが最も多く 8.5 冊 (25 位) であり、23 位の Harvard University Press と Rowman & Littlefield の 10 冊、26 位の Indiciem Verlag (7.5 冊) の間に位置している。そして、長銀国際ライブラリー基金の 2.5 冊 (48 位)、香港大学出版社の 2 冊 (49 位) などとなっている。日本の出版社では財団法人や基金が前面に出ており、大学出版会や民間の出版社が上位を占める米英とは少々異なった様相を呈している。

一般論として、日本関係の書籍、とりわけ研究書は資料が最も豊富に揃っており、かつ多数の日本研究者を擁している本場日本で最も多く出版されていると考えられる。それに対して表 2・表 3 によると、日本で出版された書籍で JJS の書評対象になったものは非常に少ない。その理由の 1 つとして、日本の著者や出版社が日本国内の学会誌や専門誌などでの書評を重視し、書籍を同誌に送付

しないこと、ほとんどすべての書籍が英語ではなく日本語で執筆されているため、英文学術雑誌である JJS での書評には適さなさいと判断し、同誌への送付を遠慮している可能性を指摘することができよう。

### 3. 4. 評者の所属国

表 4 が書評論文の執筆者、書評の評者を所属国別に整理したものである。執筆者・評者の所属は書評論文・書評に記載されたものであり、必ずしも現在の所属とは限らない。なお、書評論文や書評を 2 名以上で執筆している場合、執筆者の所属国が複数ある場合は、それぞれ執筆者数・所属国数で除した。たとえば、A、B、C3 名で 1 本の書評を執筆、A が M 国の大学、B が P 国の大学と Q 国の研究所、C が X 国・Y 国・Z 国の大学に所属している場合、M 国には  $(1 \div 3) \div 1 = 1/3$  名、P 国ならびに Q 国にはそれぞれ  $(1 \div 3) \div 2 = 1/6$  名、X 国・Y 国・Z 国にはおのおの  $(1 \div 3) \div 3 = 1/9$  名、を割り当てる。

表 4 書評論文・書評執筆者の所属国

順位	所属国	執筆者数	順位	所属国	執筆者数	順位	所属国	執筆者数
1	米国	646.5	9	イスラエル	7	17	ベルギー	1
2	日本	92.5	9	ノルウェー	7	17	デンマーク	1
3	英国	69	11	オランダ	6	17	韓国	1
4	カナダ	31	12	オーストリア	5	17	ポルトガル	1
5	豪州	27	12	スウェーデン	5	17	スイス	1
6	ドイツ	15	14	中国香港	4	合計		950
7	ニュージーランド	13	15	フランス	2			
7	シンガポール	13	15	ロシア	2			

(注) 1. 執筆者数は延べ人数である。1 本の書評を複数名が執筆している場合、執筆者の所属国が複数ある場合は、それぞれその数で除した。

2. 在外公館所属者は本国を所属国と見なした。

4. 28 巻 2 号 (2002 夏) の書評で取り上げられた VHS1 作品は含めていない。

(出所) *Journal of Japanese Studies* のハードコピー、各大学等のウェブサイトより筆者作成

書評の執筆者は米日英加豪という日本と比較的関係の深い国だけでなく、イスラエル、ノルウェー、スウェーデン、ロシア、デンマーク、ポルトガルにも及んでいる。国際的な学術雑誌で日本関連書籍の書評を依頼されるほどの研究者が広く存在していることを表 4 は示している。

執筆者の延べ人数が最も多いのは米国の 646.5 名であり、全体の 68% に達している。JJS が米国シアトルにあるワシントン大学に事務局を置く英文学術雑誌であることを考慮すれば当然とも言えよう。第 2 位が日本で 92.5 名 (9.7%)、第 3 位以下は英国 69 名 (7.3%)、カナダ 31 名 (3.3%)、豪州 27 名 (2.8%) などとなっている。表 2 が示すように日本は書評対象となった書籍の発行数では第 4 位 (18 冊、全 1008 冊の 1.8%) に過ぎないが、90 名を超える書評執筆者を擁し評者数では第 2 位である。このように日本に関しては延べ書評執筆者数が書評対象書籍数を大きく上回っているが、これは日本の研究者が英語で学術書等を執筆する機会、あるいは書評を求めて同誌に著書を送付することが少ないにしても、書評を担当するのに相応しい専門家という評価を JJS から受けていることを意味している。

アジアに目を向けると、シンガポールが 13 名 (1.4%)、香港が 4 名 (0.4%)、韓国が 1 名 (0.1%) の書評執筆者を輩出している。シンガポールと香港は英語圏に分類することが可能であるが、韓国

は明らかに英語圏に属していない。英語圏に属していない韓国が書評執筆者を輩出しているのに対して、同じ非英語圏である中国・台湾を勤務地とする書評執筆者は一人もいない。2001年から2015年というサンプル期間において、中国・台湾は同地で発行された日本関係の書籍が書評の対象とされることもなく、また中国・台湾に勤務する日本研究者が書評論文の執筆者になったり、書評の評者となることもなかったのである。

### 3. 5. 評者の所属機関

では、書評論文あるいは書評の執筆者は具体的にどのような機関に所属していたのであろうか。評者の所属国数を計算したのと同じ方法で計算したのが以下の表5である。表5は岡崎(2014)で取り上げた編集委員・諮問委員とは異なった、日本研究者の国際学術ネットワークと見ることもできる。

書評論文・書評執筆者を延べ人数で見た上位11大学は米国10大学、英国1大学であり、表4とも符号する。Harvard、Yale、UC, Berkeley、SOASといった国際的に著名な大学が上位に位置しているが、延べ執筆者数全体に占めるシェアはトップのHarvardでも2%を少し上回る程度である。サンプル期間の15年間に合計288機関の研究者が書評論文を執筆したり書評を担当、1機関あたり平均3本強であり、書評論文・書評の執筆者は分散している。日本についても同じように執筆者は分散しており、東京大学の21位を筆頭に私立大学、地方国立大学など43機関から評者が選ばれている。地理的にも北海道から九州にまで及んでいる。

表5 書評論文・書評執筆者の所属機関

順位	機関名	所属国	述べ執筆者数
1	Harvard University	米国	22
2	University of Washington	米国	18
	Yale University	米国	
4	University of California, Berkeley	米国	17
5	Boston University	米国	16
	University of Hawai'i, Manoa	米国	
7	School of Oriental and African Studies, University of London	英国	15
	University of California, Los Angeles	米国	
9	Georgetown University	米国	14.5
10	University of California, Santa Barbara	米国	14
	University of Texas, Austin	米国	
18	National University of Singapore (新加坡国立大学)	シンガポール	10
	その他2大学	米国	
21	University of Tokyo (東京大学)	日本	9
	その他3大学	米国	
27	Rikkyo University (立教大学)	日本	7
	その他10大学	米独加	
38	Sophia University (上智大学)	日本	6
	その他11大学	米英など	
63	Hitotsubashi University (一橋大学)	日本	4
	Meiji Gakuin University (明治学院大学)	日本	
	その他18大学	米豪など	
84	Chinese University of Hong Kong (香港中文大学)	中国香港	3
	International Research Center for Japanese Studies (国際日本文化研究センター)	日本	
	J. F. Oberlin University, Tokyo (桜美林大学)	日本	
	Nanzan University (南山大学)	日本	

	Osaka University (大阪大学)	日本	
	Tokyo Institute of Technology (東京工業大学)	日本	
	その他 24 大学	米豪など	
114	International University of Japan (国際大学)	日本	2
	Kwansei Gakuin University (関西学院大学)	日本	
	National Graduate Institute for Policy Studies (政策研究大学院大学)	日本	
	National Institute for Agro-Environmental Sciences (農業環境技術研究所)	日本	
	Nihon University (日本大学)	日本	
	Ritsumeikan Asia Pacific University (立命館アジア太平洋大学)	日本	
	Shiga University (滋賀大学)	日本	
	Singapore Management University	シンガポール	
	Taisho University (大正大学)	日本	
	Temple University, Japan (テンブル大学ジャパンキャンパス)	日本	
	Tenri University (天理大学)	日本	
	United Nations University (国際連合大学)	日本	
	Waseda University (早稲田大学)	日本	
	その他 34 機関	米豪など	
161	Keio University (慶應義塾大学)	日本	1.5
	その他 1 機関	米国	
163	Akita International University (国際教養大学)	日本	1
	Aoyama Gakuin University (青山学院大学)	日本	
	Chuo University (中央大学)	日本	
	City University of Hong Kong (香港城市大学)	中国香港	
	Dong-A University (東亜大学校)	韓国	
	Doshisha University (同志社大学)	日本	
	Gifu University (岐阜大学)	日本	
	Hiroshima City University (広島市立大学)	日本	
	Hokkaido University (北海道大学)	日本	
	INSEAD, Singapore	シンガポール	
	International Christian University (国際基督教大学)	日本	
	Japan Women's University (日本女子大学)	日本	
	Kobe University (神戸大学)	日本	
	Meiji University (明治大学)	日本	
	Musashi University (武蔵大学)	日本	
	Musashino Art University (武蔵野美術大学)	日本	
	Nagoya University (名古屋大学)	日本	
	Naruto University of Education (鳴門教育大学)	日本	
	Oita University (大分大学)	日本	
	Shinshu University (信州大学)	日本	
	Takushoku University (拓殖大学)	日本	
	Tokyo Jogakkan University (東京女学館大学)	日本	
	University of Tsukuba (筑波大学)	日本	
	その他 97 機関	米英など	
283	6 機関	米英スイス	0.5
	無所属・不明		11
	合計 (288 機関)		950

(注) 1. 28 巻 2 号 (2002 夏) の書評で VHS 作品 1 本が取り上げられているが、本表では VHS 作品の評者を執筆者数に含めていない。

2. 複数の評者が共同で書評を執筆している場合、また執筆者の所属が複数ある場合は、執筆者数ならびに所属機関数で除した。

3. 10 位未満はアジア関係のみ掲載した。

(出所) *Journal of Japanese Studies* のハードコピー、大学など関連ウェブサイトより筆者作成



#### 4. 終わりに

本稿では、2001年から2015年の15年をサンプル期間としてSSCIに収録されている日本専門学術雑誌 *Journal of Japanese Studies* の書評論文・書評で取り上げられた書籍（VHS作品を除く）1008冊の出版地と出版社、そして書評論文・書評の延べ執筆者950名が所属する国（地域）と機関を分析をした。

その結果、書評論文・書評対象書籍の出版地としては米国が656.5冊、比率に直すと全体の65%を占めて他国を圧倒、2位は英国の235冊（23.3%）であり、米英両国で88%、全体の9割弱に達することが判明した。日本は18冊で4位（1.8%）、日本以外のアジアでは香港で出版された書籍2冊（0.2%）の書評が掲載されたのみである。日本の隣国である中国大陆、台湾、韓国でも日本関係の専門書は多数出版されているが、JJSに書評は掲載されていない。

では、なぜ、日本研究の本場である日本の書籍が書評の対象とされることが少なく、さらには隣国である中国・台湾・韓国で発行された書籍がまったく取り上げられないのか。日本研究者が日本語の文献を読むことが可能であることは言を待たないが、JJSが米国に事務局を置く英文学術雑誌であることから、著者や出版社が書評を求めて同誌に日本語の書籍を送付するのを遠慮しているのではないかと考えられる。中国・台湾・韓国については日本と同じ理由以外に言語の問題も指摘できよう。中国語や朝鮮語（韓国語）で執筆された学術書をJJSに送付しても、JJS側で書評可能な研究者が見つけれない恐れもある<sup>4)</sup>。

延べ人数で見た書評・書評論文執筆者数でも米国が646.5名（68%）と2位日本の92.5名（9.7%）を大きく引き離している。執筆者延べ人数は米日で739名、全体の8割近くに達しており、書評論文・書評は米日の研究者に大きく依存している。日本以外のアジアからは、シンガポール13名（1.4%）、香港4名（0.4%）、韓国1名（0.1%）が書評の評者となった以外、中国・台湾の書評論文・書評執筆者は見られない。JJSの書評論文・書評の執筆者の所属は、中国・台湾の日本研究者が国際的な日本研究者のネットワークで相対的に認識されていないことを示唆している。台湾の日本研究者だけでなく、日本や中国そして韓国の日本専門家にも当てはまることであるが、自国で出版された日本関係の専門書を積極的にJJSに送付したり、英文に翻訳して特に米英で出版し著名学術雑誌で書評を求め、世界の日本研究者にアピールする必要があることを上記のデータは暗示している<sup>5)</sup>。

本稿は2001年から2015年までの15年をサンプル期間として米国ワシントン大学に事務局がある日本専門学術雑誌 *Journal of Japanese Studies* の書評論文・書評の対象とされた書籍を分析した。次は、日本の上智大学に事務局があり、A&HCIに収録されている日本専門の人文系学術雑誌 *Monumenta Nipponica* の書評論文・書評を取り上げる。

#### 付記

本稿の掲載を許可して下さった『立命館文学』編集委員会ならびにご紹介の労を賜った北村稔教授（立命館大学文学部）に深甚の謝意を表する次第である。また、本稿執筆に際しては黄福慶教授（中央研究院近代史研究所）および林滿紅教授（中央研究院近代史研究所）からご恵贈いただいた文献を参考にさせていただいた。黄・林両教授にも厚く御礼を申し上げる。当然のことながら、有りうべき誤りはすべて筆者個人が負うものである。

## 注

- 1) 以上は岡崎 (2014;2016) に依るところが大きい。
- 2) 編集委員および諮問委員について、JJS では創刊号 (1974 年) から 2013 年までの編集委員と諮問委員、MN は編集委員の所属が掲載されていないので 1997 年から所属が掲載されるようになった諮問委員 (2013 年まで)、SSJJ は創刊号 (1998 年) から 2013 年までの編集委員ならびに諮問委員を調査した。
- 3) たとえば、李・王 (2015) では「…、雖已讓我出版了三本專書、兩本論文集及八十餘篇學術論文，但以《茶、糖、樟腦業與臺灣之社會經濟變遷，1860-1895》與 *China Upside Down* 為例，書的影響仍然大於論文」(p.171)、「由於以書尤其以英文書出版的影響力更大，…」(p.172) と記されている。
- 4) 本稿の続編で分析対象とする SSJJ に中国語で執筆された北一輝研究書を取り上げた書評 (Sato 2005) が掲載されたことがあるので、少なくとも SSJJ においては朝鮮語 (韓国語) はともかく中国語で書かれた日本研究書の書評が全く不可能というわけではない。
- 5) その他、評価の高い国際学術雑誌に論文が掲載され知名度が高まると書評の執筆依頼を受ける可能性が高まると考えられる。

## 参考文献

- 川島 真 (2003) 『台湾における日本研究』財団法人交流協会
- 李宇平訪問・王超然記録 (2015) 「林滿紅女士訪問記録－海關資料開啓の四十年研究」李宇平等主訪・周維朋等記録『中央研究院近代史研究所口述歴史叢書 (97) 近史所一甲子：同仁憶往錄 (下冊)』中央研究院近代史研究所、pp.133-72.
- 西川 潤 (2010) 『台湾における日本研究－制度化の現状、課題と展望－』早稲田大学台湾研究所
- 岡崎幸司 (2014) 「台湾における日本研究－国際学術ネットワークと台湾の日本研究者－」『立命館文學』立命館大学人文学会、第 640 号、pp.15-25.
- \_\_\_\_\_ (2016) 「研究の国際化と台湾の日本研究－日本専門国際学術雑誌掲載論文の分析－」『立命館文學』立命館大学人文学会、第 647 号、pp.35-43.
- Sato, Minako (2005), *Bei Yi-hui de Ge-ming Qing-jie—Zai Zhong-ri Liang-guo Cong-shi Ge-ming de Li-cheng* (Kita Ikki's Radical Complex: The Course of His Involvement in Chinese and Japanese Revolutions), by Huang Tzu-chin, Taipei: Academia Sinica, 2001, *Social Science Japan Journal* 8 (1): 131-3.
- 徐 興慶 (1999) 「現代の台湾における日本研究」『天理大学学報』天理大学学術研究社、第 190 輯、pp.129-50.

(中華大学人文社会学院副教授)